

浦谷義
春著述

小學人身窮理書

上

水水

學		長	
數冊	冊記	號冊	
二	一	四	
	○		
學校	縣中	滋賀	

窮

言

460
842
Vol.1

浦谷義春著述

小學人身窮理書

版權所有 東崖堂藏

學校印

小學人身窮理書

凡例

講究スルハ、醫學ノ一科ナリ而、理學、化學、解剖學ヲ
 組織學等ノ順序ヲ履マザレバ、素ヨリ之ヲ解ス
 不能ハズ、此編ノ如キハ專ラ小學用ノ主義ヲ以
 テ記述スルモノナレバ、勉メテ簡約ニシテ容易
 ク了解スルヲ要スル目的ナレハ、先ツ人身解剖
 ノ大要ヲ摘ミ次ニ生理ノ勉メテ世俗ニ接近ナ
 ルヲ説キ、終リニ身體ノ利害得失ヲ健全學的ニ

編述ス、覽官幸ヒニ其複雜ヲ咎ル無ク、編者ノ勞ヲ諒察アラシム。一此書ハ各書ヲ校譯スルモノ少カラズ、米國ダルトン氏、ヒュアン、ヒシヨロジ、ヒチコツク氏、カワトル氏、コーミシグ氏等ノ生理解剖等ヨリ引書トシ、加フルニ編者ガ本邦目今ノ衛生上注意ス可キ鄙見ヲ加ヘタルモノナリ、一生殖器論ハ、生理學ニ於テ緊要ノ條項ニシテ、輒今ノ新説ニ由レバ、特ニ精微ヲ極メタルモノニシテ、之ヲ説クモ容易ク了解ス可キニ非ズ、加

之春信將發ノ少年ニ之ヲ授クルハ、醫學上ノ外ハ聊カ風俗ニ關スル處ナキニ非ス、故ニ此編ニ於テ故ラニ之ヲ省略ス、覽者其欽亡ヲ責ムル勿レ、一本編上下冊ハ、鈔圖而已之ヲ畫キ、別幅掛圖ト對照シ、授業ノ便ニ備ス、

於大阪南翠館

紀元二千五百四十年三月八日

浦谷義春誌

小學人身窮理書
卷之上
目次

小學人身窮理書

目次 卷之上

總論

第一課

骨骼論

第二課

軟骨、軟膜

第三課

筋肉論

第四課

腱、筋、筋寒

第五課

皮膚論

第六課

真皮、表皮、汗腺、脂腺

第七課

結締組織

此書之宗旨，在於窮理盡性，以明人倫。其理之精微，非筆墨所能盡述。然其理之切要，則在於此。故特將此書之目次，列於左。俾學者一覽而知其大略。其理之精微，則在於此。故特將此書之目次，列於左。俾學者一覽而知其大略。

第四課

第一項 咀嚼器論

齒牙

第二項 唾液調和論

唾腺

第三項 嚥下器論

舌 咽頭 聽嚥魚

第五課

消化器論

第六課

吸收器論

第七課

分泌器及同化器論

第八課

排泄器論

目次 卷五上 肝、膽、門脈、脾、胰

卷之下

第九課

血液循行論

心臟、動脈、靜脈、毛細管

第十課

呼吸論 付體溫之說

肺、橫隔膜、氣管支、氣胞

第十一課

發聲器論

甲状軟骨、披裂軟骨、會厭軟骨、環狀軟骨

第十二課

神經系論

大腦、小腦、延髓、脊髓、腦神經、脊推神經

知覺神經、運動神經、間錯神經、

第十三課

視官論

眼球、眼瞼、睫毛、眉毛、淚管、

第十四課

聽官論

外耳、中耳、內耳、耳內小骨、

第十五課

嗅官論

鼻、鼻粘液膜、

第十六課

味官論

舌乳嘴、

第十七課

觸覺官論

皮膚神經、

第十八課

生活力論

目次畢

小學人身官理書

目次

三

小學人身窮理書卷之上

大日本大阪浦谷義春著述

總論

夫レ吾人ノ地球上ニ生活スルハ如何ナル道理
 ナルヤ之ヲ講究スル學問ヲ生理學ト謂フ生理
 學ヲ學バント欲セバ先ヅ宇宙間萬物ノ理ヲ究
 人身體ノ造構位置成分等ヲ知ラザル可カラズ
 萬有ノ理ヲ説クヲ物理學ト云ヒ諸般ノ成分ヲ
 和合分拆スルヲ化學ト稱シ身體造構ノ位置ヲ

卷十八終

主六終

知ルヲ解剖學ト謂フ、吾人ガ大氣中ニ生活スルハ猶ホ魚ノ水中ニ活游スルト等シト云フ、道理ヲ理學ニテ説キ、其大氣ハ酸素ノ廿一分ト窒素ノ七十九分ヨリ成立ツヲ化學ニテ論ジ、肺臟ハ大氣ヲ呼吸スル器械ナリト解剖學ニテ辨シ、右ノ三學ヲ合シテ身體ハ他ノ温熱ヲ借ラズ、シテ自然ニ温暖ナルハ、肺臟ニ大氣ヲ呼吸シテ、酸素ヲ吸ヒ炭酸ヲ嘘キ、血液ヲ燃燒スルヲ以テ常度ノ血温アリト、説明スルハ、即チ生理學タルガ如シ、生理學ニテ造化妙巧ノ理ヲ窮メ、性命ノ

貴重ナルヲ考ヘ、身體ノ利害ヲ説クヲ健全學即チ法ト謂フ、凡ソ人ノ世ニアルヤ、財産榮譽ノ二ツヲ存スルモ生命アラザレバ之ヲ如何成スル能ハス、先哲謂ヘルトアリ、一身ノ生命ハ全世界ヨリモ貴重ナリト、嗚呼宜ナル哉、此言ヤ今此編ニ於テ解剖生理健全等ノ大意ヲ初等學科ノ主義ヲ以テ次章ヨリ説キ初ム可シ、

第一課 ○ 骨骼論

人身ノ骨數ハ種子骨ヲ算入シテ二百十一個ニシテ、頭蓋骨八個、頤骨一枚、顛顛骨二枚、顛顛骨

二枚、枕骨一枚、蝴蝶骨一枚、篩骨一枚、顔面骨十四
 個、即鼻骨二枚、淚骨二枚、顴骨二枚、上顎骨二枚、口
 蓋骨二枚、鋤骨一枚、下甲介骨二枚、下顎骨一枚、
 シテ、頭蓋顔面ヲ合シテ廿二個之ヲ、髑髏ト云フ。
 胸骨ハ脊椎骨二十六枚、孟骨二枚、肋骨二十四枚、
 胸骨一枚、舌骨一枚、都合五十四骨トス、上肢骨六
 十四個、即肩胛骨二枚、鎖骨二枚、上臂骨二枚、腕骨
 二枚、尺骨二枚、腕骨二列ニシテ十六個、腕前骨十
 個、手指骨二十八個、下肢骨ハ大腿骨二個、膝蓋骨
 二個、脛骨二個、腓骨二個、跗骨十六個、跗前骨十個、

趾骨廿八個ノ六十二個ナリ而シテ種子骨ノ手
 指足趾一アルモノヲ合シテ全身骨ノ總數トス、
 骨ノ成分ハ百分中動物質三十三、三ヨリ成リ土
 質分六十六、七ナリ、膠質分ハ動物質ニ含ミ、燐酸
 加爾基炭酸加爾基ハ即土質分ナリ、骨ヲ燒ケバ
 動物質ハ煙トナリテ蒸散シ、跡ニ白骨ノ土質分
 而已殘ルナリ、
軟骨ハ恰カモ鯨鬚或ハ鱈魚骨ノ如ク是レ動物
 質多ク土質分少ク撓屈シ易キモノナリ、人身ニ
 在テハ關節ノ間、肋骨ノ前部、胸骨下端、劍狀軟

體操運
動シテ
骨節ヲ
平均ナ
クシムル
也



骨耳ノ外廓氣管及氣管
 支等ハ生涯軟骨ナリ
靱帶ハ強靱ナル帶ニシ
 テ骨互ニ關節スル間ヲ
 繋ギテ運轉ノ操ヲナス
 紐ノ如シ、喩ハ下顎ノ頭
 顛ヲ繋ギ阻礙咬齧ノ機
 能ヲナシ、頸ノ俯仰手足
 運動等ハ靱帶及ヒ筋
 ノ作用ナリ、

凡ノ人身ニ骨アルハ恰カモ家屋ニ柱有テ重物
 ノ支柱トスル如ク、身體中貴重ニシテ柔軟ナル
 部喩ハ腦脊髓動脈及靜脈諸内臓ノ如キ形器ヲ
 保護シテ容易ク傷害ヲ被ラガラシムル妙巧ヲ
 備フ、小兒ノ骨ハ動物質多ク土質少キガ故ニ撓
 屈シ易ク骨ノ位置偏倚シテ佝僂龜胸トナル
 往々アリ學校ノ椅子高キニ過キ足地ニ届カザ
 ルキハ彎脊トナルアリ、宜シク放課時間ニ道
 遙體操鞦韆等ク運動ヲナシ骨ノ重カヲ平均セ
 シムベク、又老人ハ漸ク動物質減ジ土質分多ク

筋ノ名
轉作同
ヲ詳論
ハルハ
專門學
ニアル
ヲ以テ
之ヲ省
ク

ナルヲ以テ骨質脆ク僅カニ跌倒スルモ骨ヲ折傷スルコトアリ

第二課 ○ 筋肉論

筋肉ハ脈管神經等ヲ含有シタル赤色ノ纖維ニシテ其端ハ**腱**トナリ各筋皆頭腹尾**第三**ノ三部ヨリ成ル全身ニ於テ筋ノ總數ハ凡ソ二百十九筋ニシテ頭及顔面三十五筋、頭筋三十五筋、胴筋五十二筋、上肢四十六筋、下肢五十一筋、在テ各身體ノ運動ヲ主ドリ隨意筋、不隨意筋ノ區別アリ隨意筋ハ意識ヲ以テ自在ニ運動スル筋肉ニシ

論

筋

ラ頸手足ノ諸筋ノ如シ、不隨意筋ハ意識ニ隨ハザルモノニテ喩ハ咽喉、心臟、子宮等ナリ、筋肉ノ彼此相互ニ隔ツ間ニ竹ノ内皮ノ如キ、透明ナル薄キ膜アリ之ヲ**筋莖**ト謂フ、

凡ソ吾人ノ喜怒哀樂愛惡欲ノ七情、顔面ニ顯ハルハ所謂色外ニ現ハルト謂フ如ク、心中喜悅アラバ自然ト歡ビノ眉ヲ開キ悲哀ノ情アルハ眉ヲ擧メ、其他怒氣髮帽ヲ衝キ、愛情戀々クレバ流涎スルニ至ルモ皆此筋肉縮舒ノ機能ニ由ラザルハナシ、又筋肉運動ノ妙機ハ**習煉**ニ依テ

醫學人具實里書

五

行軍ニ於ル娛話シテ朋友ト連行スレハ道路ノ
遠キヲ覺ヘザルガ如シ、

第三課 ○肌膚論

肌膚ハ周身ヲ被覆スル皮膚ニシテ、甲ヲ表皮内又
=皮モ共乙ヲ**真皮**ト謂フ、表皮ハ最モ表部ニアル
透明至薄ノ皮ニシテ、湯火傷發泡等ニ依テ水胞
ヲ生ズルハ表皮ナリ、真皮ハ無數ノ氣孔ヲ有シ
テ腠理ト名ク内ニ**汗腺****脂腺**アリ汗腺、細尿管
ヨリ水分ヲ蒸發シ**脂腺**ハ皮膚ヲ滑潤ナラシム、
結締組織或ハ**蜂巢組織**ハ真皮ト筋肉ノ間ヲ結

締シタル**蜂巢状**ノ間隙ニシテ中ニ**脂肪**ヲ充ツ
脂肪ハ皮膚ヲ潤滑ニシ**摩傷**ヲ防グモノトス、
世界ノ人種ニ依リ色ノ異ナルハ皮膚下色素ニ
由ルモノナリ**歐羅巴人**ハ白ク、**亞細亞人**ハ黄色
亞米利加人ハ銅色、**亞弗利加人**ノ**黑奴**ニ於ルガ
如シ、

皮膚ニハ**神經動脈靜脈**在テ五官ノ内觸覺ノ作
用ヲ主ドリ、寒熱痛痒ヲ知リ、身體ヲ保護ス、**獸類**
ノ皮ハ厚ク強固ナレ、**爪**、**機**、**趾**ハ反ツテ柔軟ナル
人ノ皮膚ヨリ鈍ク保護ノ作用劣レリ

皮膚ヨリ蒸發スル水ハ、一晝夜ニ、凡ソ二百四拾
 目ニシテ、若シ寒冷ニ冒觸スルキハ、閉塞シテ内
 攻シ、涕痰トナリ、或ハ下利ヲ發ス、故ニ皮膚ノ機
 能ヲ健ニスルニハ、浴湯ヲ愆ル可カラズ、浴湯ハ
 蒸發氣ヲ促ガシ、皮膚ヲ清潔ニスル緊要ノモノ
 ナリ、又衣服ハ寒冷ヲ防ギ、蒸發氣ヲ促ガス、品ヲ
 良トス、即チ毛織物ヲラネルノ類ハ、體温ヲ奪ハ
 ズ、肌膚ヲ強壯ニスルモノナリ、蒲團、夜着等ハ、毎
 朝大氣ニ晒スベシ、又力作者ノ汗ヲ流シテ濕リ
 タル衣服ヲ其儘着ルキハ、痺麻質、斯痛風等ノ病

ヲ發ス、故ニ發汗スレハ速カニ衣服ヲ着替フ可
 シ

第四課 ○咀嚙唾液調和嚥下器論

第一項 ○咀嚙器

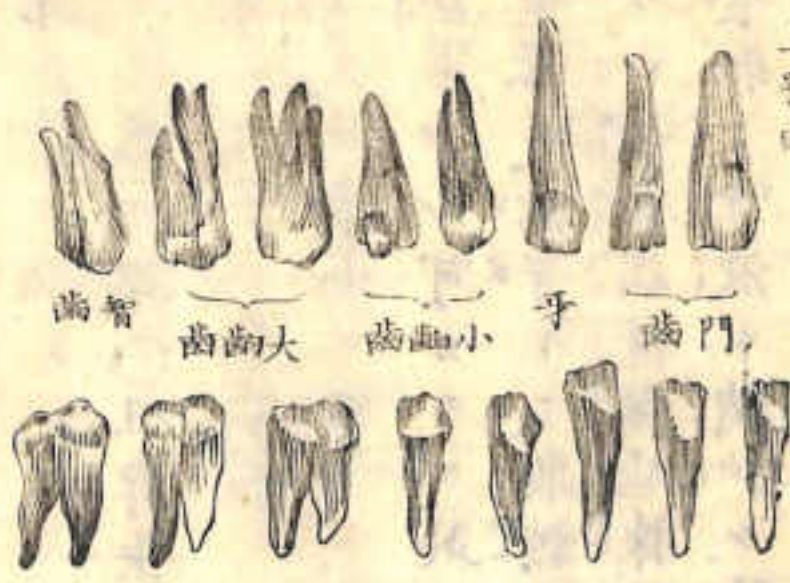
吾人ノ食物ヲ食フニ、粗大ノモノナレバ、之ヲ細
 碎セザル可カラズ、此作用ヲ咀嚙ト謂フ、咀嚙ノ
 主器ハ、齒牙トシ、顛顛筋、咬筋、内外翼狀筋之ヲ助
 ケ、口蓋、舌、扁桃腺、唾腺、懸壅垂等ヲ以テ、咀嚙セシ
 食物ヲ唾液ト調和シ、消化ヲ助ケ嚥下スルモノ
 ナリ、

小治人身醫理書

卷上

八

齒牙之圖
上顎齒



下顎齒

齒牙

ハ大人ニ於テハ上
下顎總數三十二枚トス
小兒ノ乳齒ハ二十枚ナ
リ十四歳迄ニ乳齒ハ抜
ケ替リテ持久齒トナル
齒牙ヲ區別シテ門齒前
四枚牙齒二枚小齒四
枚犬齒四枚及ヒ智齒
最終二枚都合拾六枚上
下顎合シテ三拾二枚ト

ス、齒ノ齧肉中ニ入ル部ヲ根ト云フ、外出スル部
ヲ頸ト稱シ、齒端ヲ帽ト謂フ、此部ハ珐瑯質ナル
シ、油料ト等シク堅固ナリ
齒牙ノ咀嚼作用ハ先ヅ食物ヲ脣ニテ口外ニ溢
レガラシメ、門齒牙齒ヲ以テ、齒ミ碎キ齒齒ニテ
摩搗シ細カニシ唾液ト混合ノ機能アリ
齒ハ清潔ニ保クザル可カラズ、朝起キテ口ヲ嗽
グ片ハ可及的、齒ヲ能ク磨キ食後ハ勉メテ、食滓
ヲ残留セザラシム可シ、齒ノ掃除ヲ怠ルルハ、齒
鹽ヲ生シ、齒ニ黑色ヲナシ、齲齒トナリ腐脱スル

アアリ、又俗ニ脚煙管ノ癖アルハ殊ニ金物製ノ
吸口ナレバ、齒ノ珐瑯質ヲ損害シ早ク脱落スル
印中
第二項 ○唾液調和

齒牙ヲ以テ、細碎セラレタル食物ハ、唾液ノ為ニ
軟化シ其味ニハ味官ヨリ吸収サレ、淡味トナリ
嚥下機ニ依テ胃ニ送ルナリ、
唾腺ハ耳下腺、顎下腺及ヒ舌下腺ニシテ、唾液ハ
此三腺ト口内腺ヨリ出ツ、耳下腺ハステノー氏
管ト稱スル管ヨリ頰ノ内面第二齒上第三齒



親ノ曹操
兵ニ青梅
シタルモ此腺ニ感動ヲ
テ兵ノ口内ニ津液ヲ生
青梅ノ數多アルヲ話シ
渴ヲ止メン計策ノ為ニ
昔シ魏ノ曹操ハ味方ノ
リ各部ニ開口ス、
帶ノ部ニ、口内腺ハ口内
下腺ハ、齦肉ノ近傍舌繫
腺ハ舌繫帶ノ各側ニ、舌
齒ノ間ニ口ヲ開ク、顎下

起サシノタル所ナリ、唾液ハ咽喉ヨリ出ルモ
ノニ非ズ、唾腺ヨリ分泌スルモノナリ、
水銀劑ヲ服スレハ口内ヲ糜爛シ流涎スルハ唾
腺ヲ侵ス故ナリ

第三項 ○嚥下機

食物ノ嚥下ヲ主ドル形器ハ舌、懸壅垂、口蓋、咽頭
ノ諸筋ナリ、
舌ハ飲食ヲ味フト唾液調和嚥下ノ作用ヲナシ
又咀嚼言語ヲ調フヲ助ク口内ノ要器ニシテ、其
造構ハ縱横ノ筋肉ニシテ自在ノ運動ヲナス
官味

ト參看

懸壅垂

ハ軟口蓋ノ中部ニ繫下シ口内粘膜ヲ以
テ包レタル小筋肉ナリ、吾人ノ寐テ鼾息ヲ發ス
ルハ懸壅垂ノ弛緩シテ呼吸ニ就テ激スル音ナ
リ、

咽頭

ニハ上中下ノ咽頭收縮筋アリテ食道ニ至

食物ヲ咀嚼細碎シテ唾腺ヨリ唾液ヲ分泌シテ
之ヲ軟化シ口蓋懸壅垂ヲ以テ一塊トナシ咽
頭ヲ經ルニ臨ミテ、上中下ノ咽頭收縮筋ノ開閉

作用ヲ以テ胃管ニ送下ス之ヲ嚥下機能ト云フ、
飲食嚥下ノ際談突スレバ誤ツテ飲液食塊ハ氣
道ニ陥リ呼吸ヲ遏妨スルヲアリ謹ム可シ蓋シ
飲食氣道ニ入レバ刺戟ニ依テ嘔咳ヲ發シ噴出
ス之レ造化自然ノ保護ニ出タル妙機ト云フ可
シ

第五課 ○消化器論

消化器ハ嚥下シタル食物ヲ糜爛消磨シテ血液
ノ資素タル乳糜ヲ製造スル器械ニシテ胃、小腸
大腸、肝、膽、脾、膵等ナリ

胃ハ食道ヨリ横隔膜ヲ穿行シタル膜嚢ニシテ、

左肋下及ビ上腹部ニ位シ、其形狀長圓ニシテ、彎
曲シ左端ヲ大端、右端ヲ小端ト云フ、其質ハ四膜
ヲ有ス、腹膜、筋膜、蜂窠膜、及粘液膜ニテ造構ス、胃
裏膜面ヨリ胃液ト稱スルモノヲ分泌シテ食
物ヲ消化ス、

小腸大腸ヲ合シテ長サ三十尺ヨリ三十五尺ト

ス、小腸ヲ區別シテ三トス、曰ク十二指腸、胃ノ下

門ヨリ曰ク空腸、曰ク廻腸トス、大腸ニ三區別

ス、十二指腸ハ胃ノ下口ヨリ空腸、十二指腸、横徑

ス、十二指腸ハ胃ノ下口ヨリ空腸、十二指腸、横徑

許ノ部ニシテ膽管脾管茲ニ口ヲ開ク空腸ハ廻
 腸ノ五分ノ子ナリ食物十二指腸ヨリ空腸ヲ經
 テ廻腸ニ送り、常ニ空虚ナルヲ以テ此名アリ、廻
 腸ハ紆廻シテ、其五分ノ三ヲ領ス、腸ノ内面ニモ
 若干ノ腺在テ消化液ヲ分泌ス、之ヲ腸液ト云フ
 食物ノ胃ニ下ルヤ、胃ノ收縮ニ由テ恰カモ嚢ニ
 物ヲ入レ揉ミ出スガ如ク、胃液分泌シテ、酸化泡
 酸ヲ營ミ食物ハ糜粥状トナリ十二指腸ニ下レ
 ハ膽液脾液等ノ消化液ト混合シ小腸固有ノ蠕
 動機ニ由テ彌々食物ハ糜爛シテ營養分即チ乳

糜トナリ吸收作用ヲ以テ血液ニ化シ周身ヲ榮
 養ス乳糜吸収ハ吸而ノ無用ノ糟粕ハ大便トナリ排泄ス排泄大便論ニ載ム
 食物ハ身體ノ資本ナレバ資本ノ質不良ナレハ
 榮養ノ好結果ヲナスコト能ハズシテ諸病ノ原因
 トナルコト多シ、就中食物ハ滋養分ヲ含有スルモ
 ノヲ撰ミ不消化品ヲ用フ可カラズ、何ヲカ滋養
 品ト云フ曰ク新鮮ノ牛肉、雞肉、蛋白質、牛乳等ナ
 リ此等ノ食品ヲ有窒素物又建素ト云フ麵包、温
 飽、蔬菜、脂、油等ヲ含炭水素物又燃素ト云フ、凡食

物ハ年齢氣候運動逸座等ニ依テ異ナリト雖モ
通常建素ノ一分ト燃素ノ四分ノ比例ヲ以テ良
トス、カ作多キ片ハ建素ヲ増加シ逸居ノ人ハ燃
素物ヲ多ク用フ可シ、盛夏ノ候ニハ肉食ハ分解
即チ腐スルヲ速カナレバ、可及的新鮮ノ品ヲ撰
ム可シ、食物取テ經レハ微種ヲ生ズ殊ニ不潔ノ
飲水ハ虎列刺、赤痢等ヲ發シ或時ハ蟲卵ヲ含有
シ腸内ニ種々ノ蟲ヲ生ズトアリ、冬寒ノ候ニハ
肉食、麵包、脂油及ヒ少量ノ酒類ヲ用フレバ身體
ヲ温暖ナラシム小兒ハ成長ノ機能速カナルモ

ノナレバ大人ノ准ニ比スレバ多量ノ食品ヲ要
スル故ニ輒モスレバ其度ヲ過シ胃腸等ヲ損害
スルコトアリ、且ツ消化器軟弱ナレバ硬ク消化ノ
遲キモノヲ用フ可ラス、又食物ヲ食フ時ハ可及
的毎日定刻ヲ違フ可カラス、通常食時ヨリ食時
迄ノ間ヲ六時間ヲ隔ツベシ間食ハ胃ヲ勞シテ
宜シカラズ、又食後直チニ寐ル可カラズ、消化ヲ
妨ゲ病ヲ發スコトアリ、總テ食物ハ急ギテ喰ヒ食
シテ談笑スルコト勿レ、食物ハ可及的口内ニテ能
ク咀嚼シテ唾液ト混和ス可レ、茶漬ノ飯ハ唾液

ト和スルヲ稀薄ニシテ消化遲シ凡百ノ疾病過
半飲食ヨリ發スルヲ多シ、嗚呼吾人ハ飲食ニ依テ
生活シ又飲食ニ由テ斃ル、豈慎マザル可シヤ、

第六課 ○吸収器論

吸収器ハ身體各部ニ分布スル水脈管ニシテ、此
管ハ微細透明ノ連珠狀ノ薄膜管ナリ、頸腋、下股
等ニ叢合ヒル處ヲ水脈腺ト名久、小腸ノ襞間即
チ腸間膜ニハ、鏡多ノ水脈管及ビ腺ヲ富有シテ
上ノ巨管トナリ囊狀ヲナスヲ乳糜槽ト云フ之
レヨリ乳糜管トナリ脊骨ニ沿フテ上行シ鎖骨

下靜脈ニ入ル而シテ一般ノ靜脈モ又吸収機能ア
リ腎ヨリ小腸ニ下リシ食物ハ消化セラレテ糜
粥狀トナルモノヲ小腸襞間ノ無數羅匝モル水
脈管ニ吸収スル機能恰カモ水蛭ノ吸盤ニ於ル
ガ如ク乳糜ハ乳糜管ニ湊合シテ鎖骨下靜脈ヨ
リ心臟ニ入り淡紅色ノ血ニ化シ心臟ヨリ循行
シテ彌々周リテ愈々濃厚トナリ周身ヲ榮養ス
長病人ノ數日絶食スルモ准リニ永ク生命ヲ保
ツハ曩キニ體中諸處ノ水脈管ニ吸収セシモノ
及ビ脂肪ヲ吸収シテ靜脈ニ送り僅カニ生命ヲ

維持スルモ之ヨリ養ヒテ取ルニ由ル、又蝦蟇蛇等ノ動物冬寒ノ際土中ニ蟄シテ殆ンド生活ナキモノ、如シト雖モ是レ夏日ニ養液分ヲ水脈管内ニ吸収シ置キ蟄スルニ及ビテ自己ノ體ヲ榮養スルモノナリ、瘰癧ハ頸ノ周圍ニ磊々トシテ予ニ經ル、モノナリ此病小兒ノ片發スレハ胎毒ト稱シテ身體ノ各部ニ波及シ生長ヲ妨グルニアリ、又此毒除去セザレバ青年ニ及ビテ危篤ノ肺病ヲ起シ、覽ル、モノナリ、癩毒ノ傳染ハ水脈腺ヨリ毒氣ヲ

吸収シテ受ルモノナリ、其他傳染病ノ毒ハ多ク水脈腺ヨリ感染スルヲ以テ總テ病人ノ着タル衣服ハ消毒法ヲ行ハザレバ肌膚ニ觸ル可カラズ、醫師解剖ノ片誤テ刀ヲ以テ自己ノ手ヲ創傷スル片ハ甚ダ恐ル可キ危篤ノ熱ヲ發シ斃ル、アアリ之レ水脈管ヨリ屍毒ヲ吸收シテ發スルモノナリ

第七課 ○分泌器及同化器論

分泌機能ハ肝臟ノ膽液ヲ分泌シテ食物消化ノ用ニ供シ、脾液ノ脂肪消化ニ於ル腸胃ノ粘

膜ヨリ腸液或ハ胃液ヲ分泌シテ食物ヲ消化シ
乳糜ヲ造ル如キモノヲ謂フ同化機ハ肝臟主要
ノ官能ニシテ約シテ云ヘバ血液ヲ同質即チ肝
質ニ變化セシムル作用ヲ謂フナリ

肝臟ハ體中最大ノ腺ニシテ横八寸ヨリ一尺ニ

至リ前後經五寸餘厚サ二寸五分餘重サ三百目

ヨリ四百目ニ至ル横隔膜ノ直下上腹部ニ在テ

左右兩葉ニ分チ右葉ハ左葉ヨリ大ニシテ裏面

ノ下位ニ膽ヲ腺ク

膽ハ長茄子状ノ膜囊ニシテ囊内ニハ八匁乃至

十匁餘ノ綠黄色ノ液ヲ含有ス之ヲ膽汁ト謂フ
大便ノ黄色ヲ染ムハ此液ノ混合スル故ナリ

門脈ハ腸間膜靜脈脾靜脈胃靜脈ヨリ血

液混合シテ大幹トナリ肝臟内ニ入ル其機能恰

カモ肝臟ノ門戸ノ如キヲ以テ門脈ト名ク

門脈ハ肝臟ニ入り至細ノ管トナリ肝動脈靜脈

肝實質腺質小顆ト稱スル部ニ至ル又此部ヨリ

細膽管ヲ生ジ混合シテ太ク成リ二管ヲ造リ一

ハ右葉ニ起リ一ハ左葉ニ至リ此管肝ノ裂溝ニ

至リテ肝管トナリ之ヨリ殆ン下一寸餘ニシテ

膽囊ト輸膽管ト直角ヲナシ一管トナリ **總膽管**

ト謂フ

膽液ハ肝臟ニテ造釀シ輸膽管ヲ通シテ膽囊ニ

瀦留ス食物胃中ニ膨滿シ十二指腸ニ下レバ膽

液ハ膽囊ヨリ総胆管ヲ經テ十二指腸ニ灌漑シ

食物消化ノ機能ヲナス

肝臟ニ於テ同化機ヲ營ムハ各種ノ説アレ氏先

ヅ門脈ヨリ肝臟中ニ入ル血液ニ粘糖質ナル

モノヲ含有シ血液ノ同化ニ依テ同食物ノ有窒

素物ト抱合スルモノナリト謂フ

膽管ノ口壅塞スレバ十二指腸ニ灌漑スル不能

ハザルヲ以テ逆流シテ肝臟ヨリ血管ニ吸收シ

テ周身ヲ循行シ胆汁ノ黄色ヲ顯ハス之ヲ黄疸

ト謂フ黄疸患者ノ大便白色ナルヲ以テ之ヲ知

ル可シ

脾臟ハ左季肋部胃ノ大端ニ位シ柔軟ナル紫色

ノ肉體ニシテ其形狀稍ヨリ卵圓形ナリ

脾臟ハ血液ノ蓄臓器ニシテ胃ノ官能ヲ助ケ血

液ヲ受送スルモノナリト謂フ

久シク瘡ヲ患フル片ハ左脇ニ塊物ヲ生ズルヲ

之ヲ癭母ト稱シ脾臟ノ硬結スル病ナリ、
 脾ハ胃ノ下底ニ在テ頭ハ十二指腸ニ向ヒ尾ハ
 脾ニ達スル長扁ノ帶褐白色ノ腺ナリ
 脾ハ脂肪質ヲ消化スル脾液ヲ十二指腸ヨリ分
 泌ス

第八課 ○排泄器論

身體ヲ榮養セシ有機態ノ諸液ハ無機態トシテ
 非トナリテ體外ニ謝泄ス之ヲ排泄機ト謂フ
 此作用ハ腎臟ノ尿ヲ造リテ膀胱ヨリ排泄スル
 小腸ヨリ大腸ニ食物ヲ送り榮養分ヲ吸收セ

ラレタル糟粕ハ結腸ニテ糞トナリ直腸ヨリ排
 泄スルナリ、

腎臟ハ腰部ノ兩側ニ在テ其形狀蠶豆ノ如シ左

腎ハ右腎ヨリ少シ高ク位シ上端ニ副腎ヲ冒リ

脂肪ヲ以テ全器ヲ包ミ内縁ニ深キ截間アルヲ

腎門ト稱シ大血幹ヨリ血脈ヲ通ス内部ノ空窩

ヲ腎盂ト謂フ腎臟ノ實質ヲ別テ二種トス曰ク

皮様質曰ク髓様質皮様質ハ腎ノ外層ヲナシ此

質中ニマルヒギト氏體ト稱スル小細胞アリテ

髓様質ハ圓錐形ノ細尿管ニテ造構シ其尖端即

髓様質ハ圓錐形ノ細尿管ニテ造構シ其尖端即

乳ノ相聚リテ漏斗状ヲナシ、四五個ノ漏斗合シ
テ腎盂ヲナシ、七個乃至十四五個ノ腎盂湊合シ
テ腎盂ニ開通シ、腎門ヨリ出テ輸尿管トナリ膀胱
ニ至ツテ開口ス

膀胱 ハ其形状恰カモ壘ヲ倒懸セル如ク底ヲ頂

ト謂ヒ下端ヲ頸ト稱シ、二條ノ輸尿管ヲ通ジ三

層ノ膜ヨリナル固有ノ筋質ニテ收縮括約ノ尿

満ツレバ之ヲ驅出ス

身體ヲ榮養シ終リシ老廢セシ水液ハ一ハ炭酸

ト共ニ呼氣ヨリ排泄シ、一ハ蒸發氣トナリ皮膚

ヨリ排泄シ、其他血中ニテ燃燒シテ水分ヲ腎臟
ニ吸收シ、皮様質ノ「マルピギ」氏體ニ入り尿ヲ
造リ、髓様質ヨリ腎漏斗腎盂腎盂ヲ經テ輸尿管
ニ瀝下シ、膀胱ニ入り小便トナリテ排泄ス
皮膚ト小便ノ排泄トハ表裏ニシテ、酷暑ノ片ハ
皮膚ノ蒸發氣高マリテ汗トナリテ皮表ニ排泄
スル、故ニ小便少ク冬寒ニハ外氣ノ壓力強ク蒸
發氣少ク小便多キモノナリ、
體中ニ無用物タル排泄物體中ニ留ル片ハ甚ダ
シキ害ヲ蒸スモノナリ、
腎臟ニ障碍アル

病ヲ生ルルハ體外ニ排泄ス可キ尿素血中ニ混
 流シ腦髓ヲ侵スルハ尿素病ト稱スル危篤ノ病
 ヲ發シ諸妄ヲ發シテ斃ル又小便ヲ耐ユルハ甚
 ダ害アリ之レ尿素ノ瀦留スル恐レアル故ナリ
大腸ハ之ヲ區別シテ三トス曰ク盲腸曰ク結腸
 曰ク直腸トス長サ五尺有餘ニシテ盲腸ハ小腸
 四ニ繼キ無孔囊ニ似タルヲ以テ此名アリ盲腸
 端ニ紐状ノモノアリ之ヲ蟲様垂ト名ク結腸ハ
 糞ヲ結ブ處ナルヲ以テ此名アリ結腸ヲ更ニ別
 ツテ上行部横行部下行部トス直腸ハ長サ六寸

ヲリ八寸餘ノ直ナル管ニシテ其端ハ肛門ニシ
 テ大便ノ茲ニ來ラザルハ括約筋ヲ以テ收閉
 セリ

凡ソ人身ノ第一道ト稱スルハ恰カモ一個ノ筒
 管ノ如ク初メヲ口トシ胃腸ヲ通ジテ肛門ニ終
 ル之レ榮養排泄ノ兩機ヲ主ドル一道管ナリ
 小腸内ノ蠕動機ノ震盪ニ依テ食物ハ糜爛消化
 シ榮養分ハ已ニ水脈管ヨリ吸收セラレテ血中
 ニ入リ水分ハ呼吸蒸發氣小便トナリテ體外ニ
 排泄シ食物ノ糟粕ハ漸次小腸ヨリ大腸ニ輸送

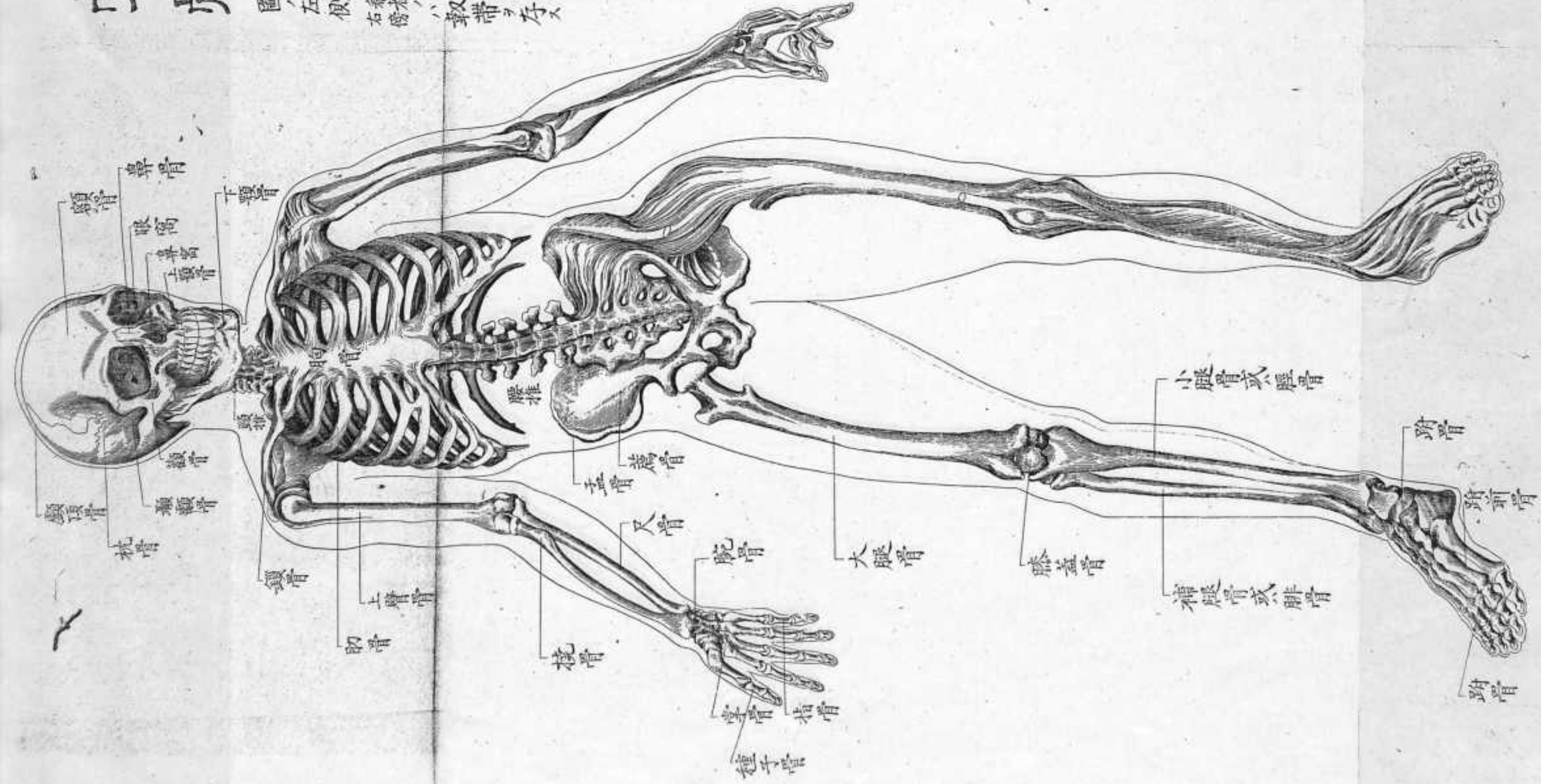


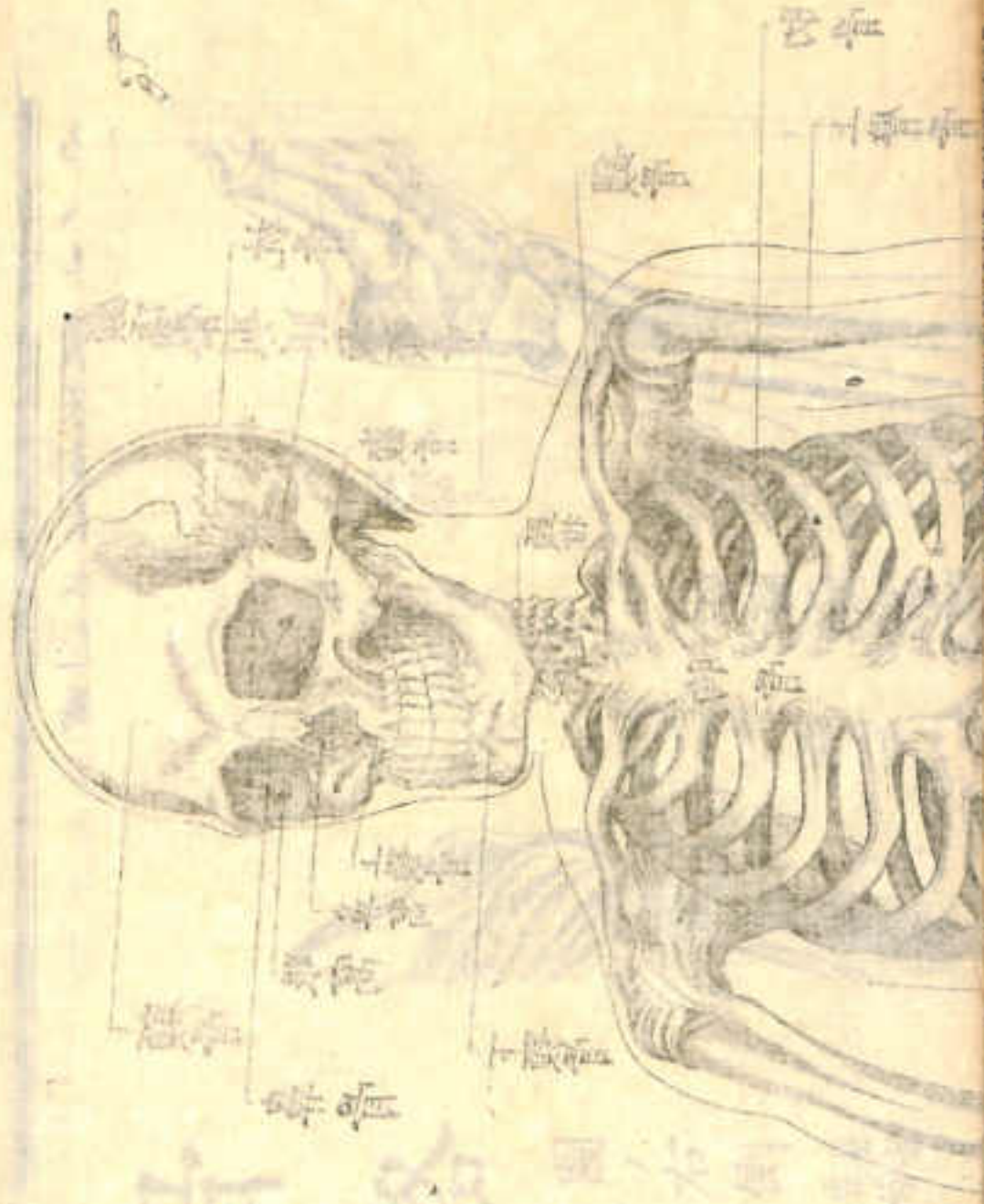
結腸内面ノ穢ニ由テ一塊ノ糞ニ化シ直腸ヨ
 リ肛門ニ至リテ大便トナリテ排泄ス、
 吾人ノ健康上注意ハ常ニ大便ニアリ若シ秘結
 スル片ハ速ニ下劑ヲ用ヒ汚惡ノ硬糞ヲ排泄ス
 可シ痔脱肛等ハ便秘ヨリ發スルモノ多シトス
 又煩嗽ノ際ハ少シノ下利モ油斷ス可カラズ虎
 列刺痢病等ノ糞ニ来ルコアリ

小學人身窮理書卷之上終

骨 骼

圖ノ右側 左看者、ハ骨 骼 示シ
 圖ノ左側 右看者、ハ韌 帶 ラ存ス





骨 駱 圖 右 側 觀
 圖 左 側 觀

